

宗教から有徳なカルチャーへ

— 在英ジャイナ移民の断食食の考察 —

濱谷 真理子*

キーワード

移動、宗教、断食、文化実践、公共的なもの

目次

- | | |
|------------------|-----------------|
| I はじめに | 2 断食の担い手 |
| 1 本論文の目的 | V それぞれの断食：解釈と実践 |
| 2 問題の所在 | 1 オールドカマーのまなざし |
| 3 本論文の視角 | 2 ニューカマーのまなざし |
| II フィールド概要 | 3 奉仕者のまなざし |
| 1 調査の概要 | VI 考察：有徳なカルチャー |
| 2 調査地と調査対象の概要 | 1 宗教的修行 |
| III ジャイナ教の食規範と断食 | 2 養生法 |
| 1 ジャイナ教の食規範 | 3 娯楽 |
| 2 ジャイナ教の断食 | 4 教養 |
| IV レスターの断食祭と断食食 | VII おわりに |
| 1 断食の場 | |

I はじめに

1 本論文の目的

本論文の目的は、英国の移民都市レスターで暮らすジャイナ移民を対象とし、彼らが宗教的伝統をどのように公共的なものとして再構築しようとしているのか、断食実践に着目して考察することである。ジャイナ教とは、マハーヴィーラ（前6～5世紀）を祖師と仰ぎ、徹底した禁欲・苦行主義を特徴とするインドの宗教で、ジャイナ教徒はグジャラート州、ラージャスタン州、ムンバイーなど西インド及び南インドを中心に居住する（矢島 2002）。インド国内には2011年時点で全人口の約0.4%にあたる約450万人が居住すると報告されている¹。本論文では海外に居住するジャイ

ナ教徒を「ジャイナ移民」と措定し、ジャイナ教徒一般について記述する場合は「ジャイナ教徒」とする。

先行研究は、ジャイナ教を厳格な教義を持つ宗教的マイノリティとして位置づけ、信仰の変容や継続性、集団的アイデンティティの形成に焦点を当ててきた（Banks 1992; Pogačnik 2018）。それに対し、本論文では、「移動が宗教をつくる」という視点に立ち、移民たちがいかにして独自のジャイナ教をつくり出しているのか、宗教的価値と実践の動態を検討する。そのために、ジャイナ教の特異な宗教性として強調されてきた食規範、その中でも断食を、日常生活を構成する食実践であると同時に、公共的に嗜まれる文化実践としてとらえなおす。特に、断食の時に摂取される断食食に着目する。そして、断食が、宗教的理念の遵守にとどまら

* 岡山大学

¹ Census 2011 India, <https://www.census2011.co.in/data/religion/6-jainism.html> 参照（2026年4月10日最終アクセス）

ず、健康・娯楽・教養など複数の価値を包含する多義的な文化実践、すなわち宗教性と世俗性を併せ持つ「有徳なカルチャー」として移民たちに実践されていることを示す。

なお、本論文では現地語として主にグジャラート語を学術的慣例に基づいてローマ字表記し、固有名詞を除いてフォントはイタリック（斜体）を使用する。また、本論文で登場する調査協力者には、公共の人物を除き、すべて仮名を用いる。

2 問題の所在

現在、約25万人のジャイナ移民がインド国外で生活しているとされる。内訳は、①アメリカ合衆国（15万人以上）、②英国（50,000人）、③ネパール（25,000人）、④ケニア（15,000人）、カナダ（5,000人）となっている（Jain 2025: 141–142）。ジャイナ移民の宗教実践やコミュニティに関して、特に移民の最も多いアメリカや英国において、人類学的・社会学的観点から研究がなされてきた（Jain and Forest 2004; Shah 2011, 2020; Vallely 2004）。近年は日本（西坂 2021; 山本 2020）や東南アジア（Zhang 2024）など、非西洋諸国におけるジャイナ移民にも光が当てられている。

本論文がフィールドとする英国レスターに目を向けよう。ジャイナ移民の英国移住は、植民地時代の少数の学者や専門職の移民を別にすれば、1960年代より行われるようになった。移民が爆発的に増加したのは1972年のウガンダ追放を契機とする。英国植民地時代に年季契約労働者あるいは自由移民としてインド人が大量に東アフリカ諸国に移住したが、1972年ウガンダ大統領により強制退国命令が施行され、約60,000人が退国を余儀なくされた。約27,000人が英国に渡り、そのうち約10,000人がレスターに移住したとされる。東アフリカから「再移住」した移民たちは「ウガンダン・アジア人（Ugandan Asians）」と呼ばれる（濱谷 2025）。その後、ジャイナ移民の富裕層はロンドンやマンチェスターに移住したが、低中間層はレスターに移住した（Pogačnik 2018: 20）。現在、英国全体で40,000～50,000人のジャイナ移民が居住していると推測される（Jain 2025; Shah 2020）。

次に、レスターのジャイナ移民の主要な先行研究を検討する。バンクスは、1982～1983年にレスターで8ヶ月間、インドで9ヶ月間フィールドワークを行い、民族誌を著した。バンクスによれば、レスターの最大ジャイナ教コミュニティであるジャイナ・ヨーロッパ

協会（Jain Samaj Europe: 以下 JSE と略記）は、当初はシュリーマリーとオースワールという2つのカーストが協力して1973年に創設した。しかし、数年後にオースワールが独立して別組織をつくる形で分裂し、シュリーマリーが中心となって協会を運営するようになった（Banks 1992: 160）。バンクスは、個々のジャイナ移民の信仰のあり方には、それぞれのカーストや宗派に基づき正統派、異端派、新正統派の3つの対立や相互作用がみられることを指摘した（Banks 1992: 211–214）。そして、ジャイナ移民が一枚岩ではなく、さまざまな集団内の差異や権力関係を包含する一方、いかに差異を乗り越えてジャイナ移民のアイデンティティやコミュニティを構築しようとしているかを示した。

ポガチニクは、2015～2016年にレスターで4ヶ月間、インドで2ヶ月間フィールドワークを行い、博士論文を著した（Pogačnik 2018）。バンクスと同様、ポガチニクも JSE を中心に調査を行い、組織内の差異やヒエラルヒーに注目した。ポガチニクは、JSE 内には各宗派のための寺院空間が設置されているが、空間の大きさや豪華さ、また日々の礼拝儀礼を行う順番などに偶像崇拜派を頂点とするヒエラルヒーがあらわれていると指摘する（Pogačnik 2018: 174–175）。また、ジャイナ教の食規範に着目し、いかに食規範を厳格に遵守しているかによっても組織内の序列化や非ジャイナ移民との差異化がはかられていると論じる（Pogačnik 2018: 192–197）。それによって、移民にとってのジャイナ教が、宗教実践の継続性を包含しながら、解釈や実践の内実が変容していることを明らかにした。

3 本論文の視角

これら先行研究は、一般的に厳格な教義を遵守する宗教的マイノリティとしてひとくくりにされやすいジャイナ移民の集団内の差異や多様性を、豊富な民族誌資料によって明らかにした点で評価できる。その一方で、ジャイナ教をやや本質主義的にとらえているのではないかという疑問も残る。バンクスもポガチニクも「本物の」ジャイナ教がインドにあるという前提をもとにインドで調査を行い、インドと英国の比較考察を行っている。しかし、19世紀以前は単一のジャイナ教が存在したわけではないというコートの指摘にもあるように（Cort 2020: 216）、どこかに本物のジャイナ教があった／あるのではなく、むしろ移動を通じて複数のジャイナ教がつくられてきたとは考えられない

だろうか。シンガポールで調査したジャンは、ジャイナ移民には3つのレベルの宗教的ハイブリディティがみられることを指摘し、「ネオ・ジャイナ教」として提示した(Zhang 2024)。必要なのは、宗教が移動によって変容するのではなく、「移動が宗教をつくる」という視点の転換である。

本論文では、英国レスターのジャイナ移民がどのように宗教的伝統を公共的なものとして再構築しているのか、断食実践に着目して考察する。なぜ、断食か。先行研究でも注目されてきたように(Pogačnik 2018; Shah 2011; Valley 2004)、ジャイナ教徒にとって食は宗教哲学を体現する根幹的な宗教実践であると同時に、序列や差異を構築する社会的・文化的実践でもある。食の中でも、特に宗教的重要度の高い断食実践に焦点を当てる。そして、次の2つの観点から事例を検討する。

第一に、一般的に非日常の宗教的苦行とみなされる断食を、日常生活を構成する食実践の一部としてとらえなおす。ジャイナ教の断食は厳格な絶食を行うイメージがあるが、断食にもさまざまな種類があり、実際には「食べる断食」も少なくない。本論文では特定の祭祀で摂取される断食食に着目し、人びとが何を食べて何を食べないのか、食の選択がどのような意味・価値と関連しながら行われているのかを記述・分析する。

第二に、パブリック・カルチャーの議論(Appadurai and Breckenridge 1995)を参照して、断食を文化実践と指定する。インドの消費文化をパブリック・カルチャーととらえたアパデュライとブレッケンリッジは、メディアの消費者を受動的な存在としてみるのではなく、受け手側の主体の多様性と主体の経験におけるさまざまなメディアの作用に焦点を当てた(田口2010: 127)。事例(1、11、12)でみるように、多様な断食食メニューの考案・発信やインターネットでの学習など、断食は宗教性を維持しながらもパブリック・カルチャーとして消費されつつあるといえる。

第三に、宗教性と娯楽性の両立を考える上で、コープマンの「有徳な有用性(virtuous utility)」の議論を参考にしたい。シク系及びヒンドゥー系新宗教団体の献血活動を調査したコープマンは、既存の宗教的贈与の慣習が世俗的フィランソロピー活動へと社会化される過程で、贈与の構造が部分的に「適応外利用(exaptation)」されたと指摘する(Copeman 2009: 52)。つまり、構造自体は維持・強化されながら、「社会的

に役に立つ」かどうかという有用性の論理を基盤として、贈与実践は霊的利益のためだけでなく一度に複数の異なる目的を果たすようになった(Copeman 2009: 62)。本論文では、断食の構造が適応外利用されることで、積徳・修行などの宗教的意義とともに健康・娯楽・教養など文化的意義が探究される、いわば「有徳なカルチャー(virtuous culture)」として実践されていることを示す。

ここで「文化」ではなく「カルチャー」とあらわすのは、断食が単に象徴的な意味体系としてではなく、手に触れられるモノであるとともに、それについて語られ、吟味され、遂行される対象として存在しているためである。さらに、断食がこうした物質的实践として、メディアや移動を通じてトランスナショナルに流通している点をふまえ、移民社会の共通語(英語)のcultureに対応した「カルチャー」を用いることとする。

II フィールド概要

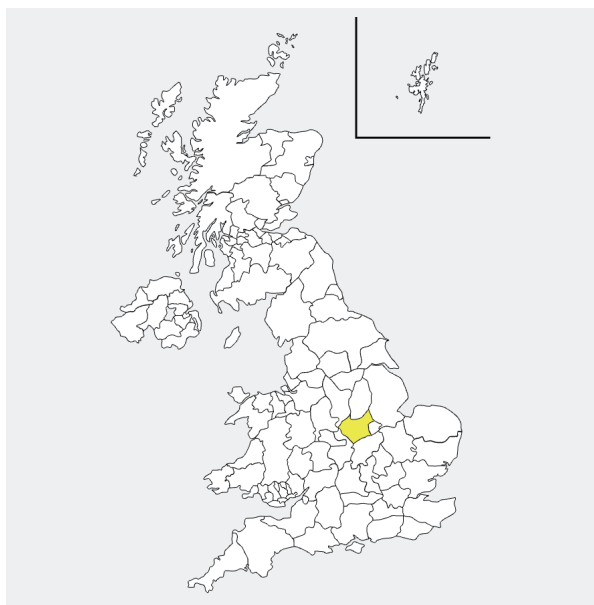
1 調査の概要

本研究では、英国レスターをフィールドとして2021年10月1日～11月8日にかけて約1ヶ月間参与観察調査とインタビュー調査を中心とするフィールドワークを実施した。参与観察やインタビューには主に英語を用い、ヒンディー語、グジャラート語を補完的に使用した。

具体的には、寺院やコミュニティ・センターなど移民団体23ヶ所、インド料理飲食店・食料品店34ヶ所を訪問し、合計108人のサーベイ調査を行ったほか、司祭5人、研究者3人から話を聞いた。移民団体の内訳は、ヒンドゥー系18、シク系3、ジャイナ系1、キリスト教系1である。そのうちジャイナ教コミュニティに関しては、パンクスとポガチニクの調査したJSEで調査を実施した。なお、JSEは現在ジャイナ・センターと呼ばれるため、今後はセンターと略記する。その際、断食について7人(女性6、男性1)及び司祭1人の聞き取り調査を実施したほか、キッチン・食堂で参与観察調査を行った。その後2022年4月～11月にかけて約8ヶ月間慈善活動に関するフィールドワークを行った際に、断食に関しても補充調査を実施した。加えて、一次資料・二次資料の文献調査を行った。

2 調査地と調査対象の概要

英国レスターシャー州(地図1)に位置するレスターは、人口約368,600人(2021年時点)のうち半数以上を非白人系民族が占める移民の街であり、そのうち約25%がインド系移民とされる。宗教別にみると、キリスト教(25%)、ムスリム(24%)、無宗教(23%)、ヒンドゥー教(18%)、シク教(5%)の順に構成される²。日本ではレスター・シティ・フットボール・クラブがサッカー好きに知られている程度で、取り立てて観光名所があるわけでもない、いたって平凡な地方都市である。一方で、インド系移民にとってレスターは特別な街だ。南アジア系の飲食店や衣料品・雑貨店などが軒を連ねる目抜き通りの「ゴールデン・マイル」は、移民たちが日常的に買い物や食事に集う主要な生活の場となっている。また、インド国外で最大規模とされるヒンドゥー教の祭ディワリー祭³には毎年英国だけでなくヨーロッパ中から数万人の観光客が集まるなど、レスターはインド系移民のシンボルとなっている。



地図1 英国レスターシャー州

センターは、郊外のインド人居住地域に集中するその他のコミュニティと違って、市内中心部に位置する。

1973年にジャイナ・サマーシ・レスターとして設立され、1988年に現在の寺院が完成した⁴。ポガチニクによれば、2015～2016年時点で約1,500～2,000人のジャイナ移民がセンターに所属しており、そのうち推定98%がグジャラート人、75～80%が東アフリカからの移民とされる(Pogačnik 2018: 21-22, 86-87)。また、大部分が白衣派(Śvetāmbara)に属する⁵。

III ジャイナ教の食規範と断食

1 ジャイナ教の食規範

(1) 食物禁忌の理念

ジャイナ教は菜食主義を基本とする厳格な食規範で知られる。ヒンドゥー教徒も菜食主義者が多いが、淨不淨の観念や伝統医学アーユルヴェーダを基準として食物を差異化するヒンドゥー的菜食主義と異なり、ジャイナ的菜食主義はアヒンサー(*ahimsā*)、すなわち不殺生の徹底を特徴とする。平たくいえば、「そこに生命が存在するか」「そこから新たな生命が生じるか」が食べてもよい食材と食べるべきでない食材を選別する判断基準となる(上田 2017: 43)。不殺生を遵守することで、悪いカルマ(*karma*: 業)が減る一方よいカルマが増え、それがよりよき来世や最終的な解脱につながると考えられているためである。

在家信者の行動規則を記した文献では、6種類の食物の放棄が推奨されるが、最も重要とされるのは、そのうち酒、肉、蜂蜜の放棄である(堀田 2011: 176-179)。そのほか、葉の物、湿った食べ物、発酵食品、腐敗した食べ物、「無数の身体」と呼ばれる玉ねぎなどの球根や大根などの根菜類・芋類も、そこに存在する／そこから発生する可能性のある微生物の殺生を避けるために規制される。ざくろやなす、トマトなど多くの種を持つ植物も同様である(上田 2017: 43-44)。

このように、アバクシャ(*abhakṣya*)と呼ばれる「食べるべきではないもの」を一覧にしたリストが11世紀には存在していたとされる(Pogačnik 2018: 184; Vallely 2004: 15)。その頃は、上述した食材を含む22

² レスター市発行の Leicester local authority profile 2023, <https://www.leicester.gov.uk/media/inmh1feq/living-in-leicester-infographic-summary-2023.pdf> 及び GOV. UK: Ethnicity facts and figures, Indian ethnic group: facts and figures, <https://www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/summaries/indian-ethnic-group/> 参照(2026年4月10日最終アクセス)

³ ディワリー祭とは、カールティカ月(10月～11月)に新年の祝福や厄除けのために行われるヒンドゥー教の灯明祭で、現代では派手なイルミネーションや花火などで熱狂的に祝われる。グジャラートではディワリー祭の翌日が新年にあたる。

⁴ Jain Samaj Europe, <https://www.jaincentreleicester.com/> 参照(2026年4月10日最終アクセス)

⁵ ジャイナ教の宗派の構成や歴史について、詳しくは渡辺(2005)を参照する。

品目が数えられていたが、その後の時代によって品目の入れ替えがあり、数にも増減がみとめられる (上田 2017: 45)。

(2) 食物禁忌の現代的展開

次に、現代ジャイナ教徒の食物禁忌についてみていく。北アメリカの「アバクシャ食」について、ヴァレリーは、①伝統的なアバクシャ食の身体的健康の観点からの再解釈、②新たなアバクシャ食の出現という2つの特徴を挙げる (Vallely 2004: 16)。より重要なのは②で、たとえば乳製品やゼラチン、レシチンなど動物性食品やそれを含む添加物が、動物の搾取の放棄または動物愛護という「社会的に動機づけられた不殺生」の遵守のために忌避される (Vallely 2004: 17)。こうした動物愛護志向は、特に北米や英国の二世世代の若者のあいだでのヴィーガン運動に顕著にあらわれている (Shah 2011; 2020)。

一方、現実生活での食規範の遵守に困難を抱えホスト社会への適応に努めるジャイナ移民も少なくない。東京と神戸のジャイナ教徒の食生活について調査した西坂は、人びとが「根菜類を避け、日没前に食事する」ことを理想とし、基本的にはジャイナの食事スタイルを維持しているものの、日没前の食事がなかなか守れないことやポテトチップスを食べる人もいるなど、さまざまな矛盾や葛藤を抱えている様子を記している (西坂 2021)。また、ヴァレリーは、ジャイナ教の若者数人とフランチャイズのハンバーガー店で食事した際に彼らが「肉なしバーガー」を注文した事例から、肉食の忌避という古来の倫理的原則と外食を通じた親交を重視するアメリカ文化という2つの価値観の消費が象徴的にあらわれていると指摘する (Vallely 2004: 21)。

端的にいえば、ジャイナ移民は確かに食規範の遵守を続けてはいるが、移動を通じて食べるべきでないもののリストの中身やその理由・動機は変容してきている。次節では、食規範の一部である断食についてみていこう。

2 ジャイナ教の断食

(1) 断食の種類

ジャイナ教の断食は、「苦行」やそこから生じる「熱」

を意味するタパ (*tapa*) と呼ばれる。断食をすることで魂に付着した業を減することができると考えられており、出家在家問わずすべてのジャイナ教徒にとってきわめて重要な実践である。現代インドにおいては、断食は丸一日何も口にしないのが一般的であるが、断食の目的や断食に伴う儀礼によって、断食の期間や内容が異なる (上田 2017: 36–37)。ポガチニクによれば、断食の方法は、次の6つに分けられる (Pogačnik 2018: 187–188)。①1日2食 (*beāsana*)、②1日1食 (*ekāsana*)、③1日1食味のない食事をする (*āyambil*)、④絶食 (*upavāsa*)、⑤8日間水以外摂取しない (*atthay*)、⑥1年間1日おきに絶食と1日1食もしくは2食をとる (*vārṣī tapas*)⁶。

移民の場合はどうか。バンクスによれば、インドと比べるとレスターではそれほど一般的に断食は行われていなかったようである。その理由は、「英国では暖をとるためにもっと食べる必要がある」「断食しながら一日中働くのは困難でできない」ためである。それに加えて、断食を主導する出家者の不在が理由として挙げられる (Banks 1992: 191)。断食への情熱や普及の程度に差はあるとしても、多くのジャイナ移民にとって断食は今でも重要な宗教的修行である。たとえば、グジャラート大地震の時に寄付を募るために若者が断食したという (Vallely 2004: 18–19)。レスターでもセンターに多額の寄付をした断食実践者は「苦行者」として名誉を与えられた (Banks 1992: 191–192)。ここからは、断食の目的や意義はより生活環境に則した社会的なものへ変容しながらも、断食が依然として重要な実践として続けられていることがわかる。

(2) 断食祭

ジャイナ教徒は、折々の祭祀や儀礼に併せて断食を行う。最大規模の断食祭は、一般的に雨季のヴィクラマ暦シュラーワナ月～バードラ月 (8～9月) にかけて8～10日間行われるパリュューシャナ (*Paryuṣaṇa*) 祭である。祭の主要な行事は、断食と公開懺悔 (*pratikramaṇa*) である (Banks 1992: 176)。懺悔はそれを通じて過去1年間積もりに積もった悪いカルマから解放されるために行われる。断食は、懺悔の準備として、1～数日間絶食を行う者もいれば、8日間通しで水しか摂取しない断食を行う者もいる。

⁶ 日常的な断食のほか、サッレーカーナ (*sallekhanā*) と呼ばれる「死に至る断食」もある (上田 2017: 37–38)。重要な断食の一つではあるが、本論文では紙幅のため割愛する。

パリュージュナ祭ほど認知されていないが、本論文が取り上げるアーヤンビル・オーリー (Āyambil Olī) 祭 (以下、オーリー祭と略記) もアーヤンビルと呼ばれる特定のタイプの断食 (上述の③) が行われる断食祭である。アーヤンビルの語源はサンスクリット語の「アーチャマ (水、汁)」と「アムラ (酸っぱい)」に由来し、オーリーは「線」を意味する。この断食自体はいつでも行えるが、年に2回、チャイトラ月 (3～4月) とアーシュヴィナ月 (9～10月) にそれぞれ9日間オーリー祭が開催される。男女ともに実践できるが、既婚女性が中心で、結婚生活の幸せや家族の健康を祈願して行うとされる⁷。祭の間、1日1食味の無い食事をとることがみとめられている。断食実践者は自宅よりも寺院やコミュニティ・センターに行き、そこで提供される特別な断食食を集団で摂取するのが特徴的である (Banks 1992; Zhang 2024)。

(3) 断食食

祭の間どのような断食食が食べられるのか。英国オースワール協会発行の資料⁸によれば、断食食の基本ルールは、ヴィガーイ (vigāy) と呼ばれる怒り、貪欲、傲慢、欺瞞の4つの感情をを引き起こす食べものを忌避することである。ヴィガーイはラグ・ヴィガーイ (粗糖、牛乳、精製バター、ヨーグルト、油、揚げ物)、マハー・ヴィガーイ (バター、蜂蜜、魚・卵含む肉類、酒) の2種類から成る。そのほか、「味の無い」食べものにするために、以下のルールが挙げられる。

- ・香辛料、粗糖以外の砂糖、塩なども極力制限する
- ・食べてもよい香辛料：乾燥生姜、胡椒、ヒング (hing: アサフェティダ)⁹など一部の香辛料、焼き塩
- ・食べてもよい食材：小麦粉、米、茹でた豆 (緑豆、レンズ豆、赤いんげん豆など)
- ・料理法はきわめてシンプル (茹でる・蒸すが中心)

それでは、実際にどのような断食食が食されている

のか。ここからは、現地調査で得られたデータをもとにレスターの事例を検討する。

IV レスターの断食祭と断食食

1 断食の場

レスター市内中心部から歩いて10分ほどのところにセンターはある。徒歩移動者にはアクセス便利な立地だが、駐車スペースがほとんどないため、車移動の者は近隣のスーパーマーケットや有料パーキングに駐車後、センターに向かわなければならない。玄関で靴を脱いで中に入ると、1階には受付、キッチン、食堂、サットサンガ (satsāṅga: 宗教的集会) のための広々としたホールがある。2階・3階には、白衣派・偶像崇拜派の寺院を中心に偶像否定派、空衣派、ラージチャンドラ派の寺院が共存している。全体的に薄暗く、寒く、イベントのない平日は閑散としていて侘しい雰囲気である。

センターは、平日は10:00～13:30、18:00～19:30に一般向けに開放され、午前中と夕方にそれぞれ礼拝儀礼が行われる。土日や祭の期間は朝から夕方まで終日開放される。日曜日には子どもたちを対象とするグジャラート語及びジャイナ教の教室を開いている。そのほか、毎月のサットサンガ、若者グループの活動、女性グループの活動などが行われている。

筆者が調査した2021年のオーリー祭は、コロナ・パンデミック後に初めて再開された祭で、マスクをつけながらではあったが、連日数十名の人びとが集まっていた。祭の間、主に1階のキッチンと食堂で、断食食の調理及び儀礼的な共食が行われた。

2 断食の担い手

調査協力者の一人、元医師ラマンバーイー¹⁰ (東アフリカ出身、推定60代) によれば、9日間通しで断食しているのは15～16人ほどとのことである。ほかに、1日または数日間だけ断食をする人もいる。平日よりも土日の方が参加者が多く、日曜日には35人ほ

⁷ Jainpedia: the Jain universe online, <https://jainpedia.org/themes/practices/festivals/ayambil-oli/> 参照 (2026年4月10日最終アクセス)

⁸ Oshwal Association of the UK, Ayambil Oli: Overview, by Shah, Kishor B., <https://oshwal.org.uk/wp-content/uploads/2024/04/Ayambil-Oli-Overview-plus-Lots-More-By-Kishor-B-Shah.pdf> 参照 (2026年4月10日最終アクセス)

⁹ ヒングは樹脂性の香辛料で、強い硫黄系の香りの特徴とする。北西インドやジャイナ教・ヒンドゥー教の料理で重用され、消化促進・ガス抜きの効能があるとされるため、断食食にもよく使われる。

¹⁰ 「バーイー (bhāī)」は兄弟、「ベーン (ben)」は姉妹を意味し、目上の人物への敬称の接尾辞として用いられるが、正式名称となっている場合もある。

どが断食をしたという。断食実践者はセンターに寄付として1日につき5〜6ポンドを納めなければならない。

オーリー祭8日目の断食実践者は、女性14人(10代1人、30〜40代2人、50〜60代2人、60代以上9人)、男性10人(10代1人、30〜40代4人、60代以上5人)だった。断食最終日には22人が集まった。一般的には女性の方が断食する者が多いといわれるが、レストランではそれほどの差異はみられなかった。半数以上が60代以上であり、高齢者が多く断食していることが指摘できる。

また、集団断食は、断食実践者だけでなく、断食食を準備する司祭と奉仕者の奉仕(*sevā*)によって成り立っている。司祭はインド・ラージャスターン州出身で、ヒンドゥー教バラモンの家の生まれ。生まれた村落にはシヴァ寺院があり、村に住む150世帯全員がバラモンだったという。グジャラート州出身の妻と結婚し、息子と娘1人ずつもうけた。英国に移住して15年ほど、センターで司祭職に就いて4年ほどになる。現在、センターでの司祭職のほか兼業でガス・エンジニア、バス・ドライバーの仕事もしている。

司祭は非常に早口かつ機敏に動く人で、早朝の礼拝儀礼を執り行いながら神像の縁起や神話について説明してくれた。また、料理の腕前も達者で、祭の間彼がすべての断食食のメニューを決定し、奉仕者に指示をしながら調理を取り仕切り、自分でも調理していた。奉仕者は、日によって異なるが、断食最終日には女性8〜10人ほど、男性4〜5人ほどで、高齢の男女が多数を占めていた。調理は主に女性が担当し、男性は給仕や荷物の運搬などに従事していた。奉仕者によれば、イベントごとに奉仕者用のWhatsapp(インドで一般的に使用されている通信アプリ)のグループがあり、毎日グループ・チャットで誰が奉仕に参加できるかを確認し合って人数調整しているそうである。

(1) 断食の過程

次に、断食最終日の行程を以下に記す。

10:00 キッチンで調理開始。22人分の断食食プレートを用意する。

10:30 2階の寺院で献火の儀礼(*ārati*)。奉仕者た

ちも作業を中断して儀礼に参加。

11:30-12:00 奉仕者たちが家から持ち寄った軽食をとる。その後調理再開。

13:00 断食実践者が集まってきて給仕開始。2列になって向かい合う形で床に座って食事するが、高齢者や身体の不自由な人びとは椅子に座って食事をする。いったん着座すると立ってはいけないルールで、奉仕者が一種類ずつ順々に食事を給仕し、料理が出揃った後も折々におかわりを尋ねてまわる。

14:00 奉仕者たちとともに筆者も断食食をいただく。
(2021年10月20日、フィールドノートより)

断食最終日の翌日は、断食実践者が人びとにギフトを配り、センターに布施をして祝宴が開かれる。その時は断食実践者の何人かが小銭やムフパットー(*muhpaṭṭo*: 白いハンカチ)¹¹、ステンレス製のグラスなどをその場にいた人びとに配っていた。

(2) 断食食

ラマンバーイーによれば、断食食には100種類以上あり、祭の間毎日メニューが変わるという。実際に、毎日20数種類の断食食が用意されていた(表1)。そのうち10〜12種類を毎朝寺院で調理し、残りのスナック類はメンバーが家で手作りして持ってきたものを提供する。特に、断食したい意欲はあっても諸事情で実践できない人がセンターに食べ物やお金を布施するそうである。

たとえば、ある日の断食食のメニュー(写真1)は以下である。

【事例1】断食食のメニュー

皮なし緑豆のドーサー(南インドのクレープ)

皮なし緑豆のスープカレー: 塩と黒胡椒、ヒング(香辛料)を加えて茹でたもの

トウガンビエのチャパーティー(薄焼きパン)

全粒粉のチャパーティー

パパール(クラッカー風) 2種類(米粉とひよこ豆)

ポップコーン 2種類

茹でた緑豆とその茹で汁

茹でた黒緑豆

¹¹ これは、虫や微生物の殺生を防ぐため、礼拝時に口にあてて使用するものである。そのほか、虫を踏み潰さないように前方を掃くための箒がジャイナ教の象徴的アイテムであり、小型の箒やキーホルダーなどさまざまな形状でグッズ化もされている。

表1 断食食のリスト（2021年レスターでの調査をもとに筆者作成）

番号	分類	食材	料理名（現地語）	料理名（日本語）	備考
1	豆類	皮なし緑豆	<i>mag dāl no doso</i>	皮なし緑豆のドーサー	南インドのクレープ
2	豆類	皮なし緑豆	<i>mag dāl nuṁ śāk</i>	皮なし緑豆のスープカレー	塩、黒胡椒、ヒングを加えて茹でたもの
3	豆類	ひよこ豆	<i>caṇā</i>	乾燥ひよこ豆	
4	豆類	ひよこ豆	<i>caṇā nī caṇṇī</i>	ひよこ豆のチャツネ	ひよこ豆を挽いて塩胡椒、ヒングを加えて混ぜたもの
5	豆類	ひよこ豆粉	<i>sev nī kaḍhī</i>	セーヴ・カレー	ひよこ豆粉スナック＋バターミルクのスープ
6	豆類	ひよこ豆粉	<i>ḍhoklā</i>	蒸しパン	
7	豆類	黒緑豆	<i>uḍad dāl nuṁ ruvā</i>	黒緑豆の団子風	
8	豆類	緑豆	<i>mag dāl nuṁ śāk</i>	緑豆のスープカレー	
9	豆類	緑豆	<i>mag dāl nuṁ pāṇī</i>	緑豆の茹で汁	ビタミンが豊富
10	豆類	黒緑豆	<i>uḍad dāl</i>	茹でた黒緑豆	
11	穀類	とうもろこし	<i>popcorn</i>	ポップコーン	自宅で調理したもの
12	穀類	トウジンビエ	<i>bājrā nā roṭlā</i>	トウジンビエのチャパーティー	薄焼きの丸いパン
13	穀類	米	<i>mamrā</i>	マムラー	米パフ、自宅で調理したもの
14	穀類	全粒粉	<i>roṭlī</i>	チャパーティー	薄焼きの丸いパン
15	穀類	米粉	<i>khīchaḍī</i>	米粉のお粥	
16	穀類	粗挽き全粒粉	<i>daliyo nī caṇṇī</i>	粗挽き全粒粉のチャツネ	炒った粉、塩、黒胡椒、ヒングをお湯で混ぜて作る
17	穀類	アマランサス	<i>rāgī nuṁ pāṇī</i>	アマランサスの白湯	アマランサス、塩、黒胡椒、ヒングをお湯で混ぜた汁
18	豆類・穀類	全粒粉、豆	<i>khakhrā</i>	カークラー	クラッカー風、自宅で調理したもの
19	豆類・穀類	米粉、ひよこ豆	<i>pāpaḍ</i>	パパル	クラッカー風、自宅で調理したもの
20	豆類・穀類	大麦、皮なし緑豆	<i>khīcaḍī</i>	麦と豆のおじや	消化促進作用
21	豆類・穀類	米、ひよこ豆粉	<i>sev mamrā</i>	セーヴ・マムラー	ひよこ豆粉スナックと米パフのミックス
22	香辛料	ハーブ	<i>kaḍu kariyātum</i>	カドゥ・カリヤートゥ	アーユルヴェーダ薬草汁
23	香辛料	ヒング、黒胡椒	<i>hing nuṁ pāṇī</i>	ヒングと黒胡椒の白湯	



写真1 断食食（2021年10月、レスター、筆者撮影）

マムラー (米パフ)
セーヴ・マムラー (ひよこ豆粉スナックと米パフのミックス)
カークラー (全粒粉のクラッカー風)
乾燥ひよこ豆
ひよこ豆のチャツネ
黒緑豆粉の団子風
カドゥ・カリヤートゥ (アーユルヴェーダの薬草汁)
大麦と皮なし緑豆のおじや
ひよこ豆粉スナックとバターミルクのスープ
(2021年10月16日、フィールドノーツより)

筆者も断食食を試食させてもらったところ、通常のインド料理と比べて香辛料が少なく比較的あっさりした味つけだったが、かなりヒングが効いていて、辛くはないものの塩分が強めのものが多かった。筆者には素材の味が活かされていて十分美味しいと感じられたが、香辛料に慣れたインドの人びとにとっては味が無いと感じられるようである。しかしながら、質を種類と量でカバーすることで、修行としてだけでなく、断食を楽しんでいる様子がみとめられた。

V それぞれの断食：解釈と実践

1 オールドカマーのまなざし

人びとはどうして、何のために断食をするのか。以下ではオールドカマー (東アフリカ出身再移住移民)、ニューカマー (再移住以降の移民)、奉仕者という3つの視点に分けて検討する。

たとえば、センターの古株メンバーであるラマンバーイーは、断食の目的を「カルマを燃やすため」と力説した。

【事例2】「カルマを燃やす」

断食の目的は、殺生や他者を害するのを最小限にすることにあります。断食をすることでカルマを燃やすことができます。それによってカルマを終わらせることができるのです。[カルマの]¹²支払いは来世に持ち越されます。今生では俗人だけ来世では僧侶になれるかもしれません。

(2021年10月19日、フィールドノーツより)

基本的に、ジャイナ教徒は悪いカルマを減らすこと、よいカルマを増やすことで、よりよき来世を期待できると考えている。しかしながら、誰もが出家者のような厳格な断食を実行できるわけではない。ジャイナ教の根本哲学に多面的真理説 (*anekāntavāda*)、つまり真理は複数の視点から理解されるべきものとする考え方があり、ラマンバーイーによれば「最善のカルマは人びとがそれぞれの宗教に従うのを助けること」である。このような解釈に基づき、断食の場合はおのおの立てた誓願 (*vrata*) に応じてさまざまなやり方で断食を行うことができる。

別の古株メンバーのスーリヤベーン (ウガンダ出身、推定60代) は、誓願の立て方について次のように説明した。

【事例3】誓願と罰

[筆者の「どうやって誓願を立てるのですか」という質問に対し] 寺院に限らず、家でもどこでもマントラを唱えて念じるだけでよいのです。もし誓願を破ってしまったら、許しを乞う (*prāyaścitta*)。インドだったら僧侶のもとへ行って行います。でも、ここだと僧侶がいないから、1日断食するとか、自分で罰を与えます。

(2021年10月16日、フィールドノーツより)

誓願に応じた断食のやり方はきわめて柔軟で多様である。ラマンバーイーの力説は続く。

【事例4】さまざまな断食の方法

断食で重要なのは、食べ物について考えないことにあります。断食しても食べ物のことばかり考えていたら意味がない。だから、[完全に]断食できない人のためにさまざまな断食の方法がある。… (中略) …たとえば、毎日4枚チャパティーを食べるのを3枚に減らす、2種類の野菜カレーを食べているのを1種類に減らす。食後にムクワース (*mukhvās*: 香辛料・砂糖をミックスした嗜好品) やアフターエイト (英国製ミント・チョコレート) を食べていたのを食べないようにする。朝食抜き、あるいは朝食後から昼食まで何も食べない。もし誰かがオレンジジュースやアイスクリームを持ってきても断る、そ

¹² 引用の中の [] は筆者による補足箇所を示す。

れも断食になる。…(中略)…たとえば、読書をしたり勉強したり瞑想したりするのも断食。キッチンで奉仕するなど誰かを助けることも断食。

(2021年10月19日、フィールドノーツより)

このように、オールドカマーの視点では、伝統的な宗教理念に基づいて断食の目的・意義が解釈されているが(事例2、3)、その実践方法はきわめて柔軟に考えられ行われている(事例4)と指摘できる。

2 ニューカマーのまなざし

ニューカマーの場合はどうか。サミクシャ(ムンバイ出身、50代)は、インドに生まれたが、大学卒業後就職のために兄弟のいたケニアに渡り、そこで夫と結婚、20年前に長男・次男出産後にレスターに移住した。子どもたちはすでに独立し、彼女はパートタイムの仕事をしながらレスター郊外の自宅に夫と2人で暮らしている。オーリー祭の時は断食をしなかったが、この2～3年パリュエシャナ祭の時に断食をしているという。2021年も3日間お湯しか飲まない断食をしたそうだ。しかし、彼女の母はもっと厳格だったと彼女は繰り返し口にした。

【事例5】「母はじゃがいももトマトも食べなかった」

母はもっと厳格で、普段からにんにくや玉ねぎを食べなかったの。じゃがいもやにんじんも、外食でそれしかないときには仕方なく食べていたけれど、できるだけ避けるようにしていた。断食中はトマトにも種子がたくさん入っているからと食べないようにしていた。私は断食中もトマトを食べるけれど。…(中略)…父は何でも食べたわ。食べ物[の戒律]を信じていなかった。ただ父は熱心に奉仕をしていたわ。

(2021年10月16日、フィールドノーツより)

ここで、根菜類と種子の多い野菜の忌避が宗教的厳格さの基準として挙げられているのは象徴的である。オールドカマーが伝統的な理念を語りつつ柔軟に断食を解釈し実践するのに対し、ニューカマーには食規範が根強く残っていることが指摘できる。

一方、どうして断食をするのか尋ねると、次のよう

に答えた。

【事例6】断食の精神的効能

断食をするとソフトになる。玉ねぎやにんにくは暗質(tāmasik)、暗質のものを食べると攻撃的になってしまう。ふだんは玉ねぎやにんにくも食べるけど、断食の時は食べない。だから、断食すると、心が落ち着いてマイルドになる。

(2021年10月16日、フィールドノーツより)

断食の心身の健康への効能は、オールドカマーにもニューカマーにも、カルマ論の語りと並んでしばしば言及されるものである。一例として、この4年間年2回オーリー祭の時に9日間断食しているという女性ラディカベーン(ムンバイ出身、推定70代)は、「来世もその次も、すべての生に[断食の功德が]行き渡るから。あと健康にもよい」と答えたように、来世利益志向とともに健康志向も指摘できる。サミクシャの場合、暗質というアーユルヴェーダの観念¹³を用いて精神的効能に言及したのが特徴的である。

3 奉仕者のまなざし

最後に、狭義の断食実践者ではないが、集団断食が奉仕者なしには成り立たないことから、奉仕者の視点もみておきたい。

断食と同様に、奉仕もまた心身の健康によいと考えられている。

【事例7】「奉仕は健康によい」

ヒンドゥー教の夫と結婚し、6年前に夫が亡くなって以来、離婚して出戻りの娘と2人で暮らしているヘーマーベーン(出身地不明、70代)は、「肺や腰などたくさん問題を抱えているが、ここ[センター]に来ると元気になる、家に帰るとグターっとする[とうつ伏せになる仕草]」と冗談めかして答えた。

ジャイナ教の夫と結婚したヒンドゥー教徒のイーラベーン(グジャラート州出身、70代)は、奉仕の理由について、「何でって、夫が[センターに奉仕をしに]来ているから。夫はもっと早くに来てい

¹³ アーユルヴェーダでは、精神に作用する性質によって食物が純質、激質、暗質の3つに分類される。純質の食べ物は精神に叡智を、激質の食べ物は激しさを、暗質の食べ物は怠惰を促すと考えられている(加瀬澤2018)。

るんだけどね、私は家の用事を済ませてから来たところ。こうやって動くのは健康によいし」とあまり深い意味はない様子で答えた。

(2021年10月20日、フィールドノーツより)

サミクシャ(事例5、6)は、ジャイナ教の奉仕だけでなく、ヒンドゥー教ヴィシュヌ派新宗教団体SDHの奉仕活動にも力を入れていた。奉仕の内容は、高齢者のためのフードデリバリー用の調理・梱包作業で、食事会がある際には給仕や片づけも行う。サミクシャは4年前から夫と一緒にSDHの奉仕に従事しているとのことだった。筆者がなぜ奉仕をするのか尋ねたところ、彼女は次のように答えた。

【事例8】「奉仕の幸せ」

「だって幸せだから。いろんな人に会えるし、友達、コミュニティのみんなにね」

筆者「奉仕をすることで徳(*punya*)が得られますか」
「そうね、カルマを減らすことができるわ。もしよい行いをしたら、よいカルマ、来世でのよいこと(*good things*)を手に入れることができる。来世ではすべてがよくなるのよ。よい行いをすればよいことが得られるでしょう」

筆者「今生では得られないのでしょうか」

「今生じゃなくて、来世でね」

(2021年10月16日、フィールドノーツより)

「徳は得られるのか」という筆者のにとってつけたような質問に対し、サミクシャは捕捉的にカルマを減らせると答えたが、彼女にとって奉仕は第一に楽しみなのである。奉仕の作業は、行うか否かは自由とはいえ、精神的・身体的に負担がないわけではない。オーリー祭では9日間毎日早朝から昼過ぎまで作業に従事する。SDHの奉仕も遅い時には22時近くまでかかることもある。それでも奉仕に従事するのは、サミクシャが真っ先に「幸せ」と答えたように、奉仕を楽しんでいるからである。

このように、断食及び断食の一部とも位置づけられる奉仕は、多義的に解釈・実践されていることがわかった。これらをふまえ、最後に断食の多義性について

考察し、断食が閉じられた宗教実践ではなく、開かれた文化実践であることを示す。

VI 考察：有徳なカルチャー

1 宗教的修行

オールドカマーの視点(事例2、3)に顕著にあらわれていたように、断食には依然として宗教的修行としての側面が根強い。筆者が驚いたのは、断食実践者のうち数人が食べた後にその場で座ったまま歯磨きをしていたことである。ラマンバーイーに尋ねたところ、その理由は以下である。

【事例9】食卓で歯磨きする理由

- ・水の使用を最低限にするため。
- ・食べた後口に食べ物が残ると、後でまたそれを食べることになってしまうから、食べ残しを防ぐため。
- ・食事に関連することを座っている間にすべて終わらせるため。

(2021年10月19日、フィールドノーツより)

これらはすべて、余計な動作や過剰な水の使用を防ぐことで、考えられうる限りの微生物の殺生を防ぐという、不殺生を遵守することを意図したものである。また、完全な不殺生が難しい場合には、できるだけ直接的・身体的な殺生を減らすことが目指される。たとえば、断食中には濾過水ではなく、沸騰した水が摂取される。その理由は、「細菌を殺さないため」である。水を沸騰させる時に1度細菌を殺すことにはなるが、水道水だと水を飲んだ後も体内で細菌が増殖し、それを殺さなければならない。そうすると殺生が増えてしまう。沸騰水だと1度の殺生で済むという理由である。

このように、特に水の使用・摂取に関して、不殺生の徹底とそれによる功德の獲得が目指されていることが指摘できる。その一方、事例4でみたように、食べ物に関してはより柔軟な実践方法がとられている。

2 養生法

近年顕著なのが、健康志向の高まりである。宗教的

規範の健康観からの読み替えや重点のシフトは、ヒンドゥー教の断食実践でもみとめられる（濱谷 2026）¹⁴。本論文でも、事例 6、7 で断食や奉仕の効能として心身の健康への言及がみられた。ヒンドゥー教の断食は大量の糖分、ジャイナ教の断食は大量の炭水化物を摂取するため、医学的には糖尿病など健康悪化リスクが懸念されているようだが、当事者には往々にして「健康によい」ととらえられている。

断食食も、健康に配慮されたものが多い。緑豆の茹で汁は「ビタミンたっぷり健康によい」、カドウ・カリヤートゥという茶色の液体はアーユルヴェーダの薬草汁で、「消化・吐き気・めまい・糖尿病などに効能がある」とのことだった。全体的に、ヒングという独特な香りの香辛料が多用されていたが、その理由として「胃腸によい、ガス・プロブレム（消化不良）に効くから」と説明された。このように、断食は養生法としてもとらえられている。

3 娯楽

さらに、奉仕者の視点に顕著にあらわれていたように（事例 8）、断食には娯楽としての側面もある。断食食は、伝統的な料理がほとんどではあるが、最近インド本国でも人気の高い南インド料理のドーサーや、ポップコーンなど、現代の流行や西洋のスナックを取り入れている点からも見てとれる。また、「毎日同じだと飽きるから」という理由でドーサーの原料の豆の種類を変えたり、多種多様な料理・スナックを用意するなど、食事を楽しむための工夫もなされている。

また、奉仕者が持ち寄りランチを「ピクニックみたい」といって和気あいあいと食べる、断食実践者がおしゃべりしながら断食食を食べるなど、共食を楽しむ様子もみられた。筆者もその共食に部分的に参加した。

【事例10】断食食を分かち合う

筆者が給仕や食事の様子を観察していると、断食中の高齢男性の一人が「アーヤンビル・ベール（*bhel*：西インドの米パフや豆類、野菜などをミックスしたサラダ風軽食）」と言って、スナック類をプレートで混ぜたものを小皿にとって私に食べてみ

なさいと勧めてくれた。ケガレにならないだろうかと心配しながらそれをいただく¹⁵。

（2021年10月20日、フィールドノーツより）

この男性をはじめ、センターの人びとが、ジャイナ教徒でもなく断食中でもない筆者に食事を分け与えてくれたのは、日本からやってきた調査者へのホスピタリティのあらわれであったこともあるだろう。しかし、コロナ・パンデミックの脅威が長引く中で、マスクをつけてでも集団断食に集い、リスクを冒してでもともに食べ分かち合う人びとからは、集うこと、食べることへのよろこびや楽しさの感情があふれていた。

4 教養

断食には教養という側面もある。数人の調査協力者から強く勧められたのは、インターネットを使って断食について勉強することである。たとえば、ラマンバーイーは、以下のように推奨した。

【事例11】インターネットの勧め

「断食には12種類の方法があります。6種類は外的な断食（external fasting）、6種類は内的な断食（internal fasting）……」と言ってから、その先の詳細の説明に詰まってしまい、「インターネットに書かれているからインターネットを見てください」と何度も言われた。しばらくしてから Wikipedia を見せられた。

（2021年10月19日、フィールドノーツより）

また、前述のスーリヤペーン（事例 3）は、苦笑しながら次のように言った。

【事例12】動画共有サイトの勧め

子どもの頃、当時はアフリカで暮らしていたのですが、断食のやり方を知らなくて、断食中にお菓子を買ってきて食べたりしていたんです。それがダメだと後で学びました。今は日曜学校で教師やグル（*guru*：宗教指導者）が正しい知識を教えているし、インターネットや YouTube（動画共有サイト）で調

¹⁴ ヒンドゥー教も特定の祭祀に応じてさまざまな断食を行うが、規範の厳格さや頻度、断食食として摂取してよいものと忌避すべきものの基準などが異なる。具体的には、炭水化物や塩が忌避され、果実や甘いもの、乳製品が摂取されるなど、ジャイナ教の断食食とは対照的である。詳しくは、濱谷（2026a, b）を参照する。

¹⁵ これは、一般的にヒンドゥー教では水や食べ物を通して不浄が感染すると考えられており、特に儀礼食に触れるには注意が必要となるためである。移民にとってのケガレの問題は改めて検討したい。

べることもできます。今の若い子の方がちゃんとした断食をしていますよ。

(2021年10月16日、フィールドノーツより)

インターネットを使って断食に関する「正しい」知識・情報を収集することは、一種の教養のようにとらえられている。特に、オールドカマーの多くは、ほとんどインドに行ったこともなく、「正しい」ジャイナ教についての知識が不足しているという認識が強い。それゆえに、断食は、幼少時からの無意識の習慣というわけではなく、最新の技術や情報源を用いてアップデートすべき教養でもある。さらに、インターネットを通じて得られるのは、断食の知識だけでなく、YouTubeなどの動画共有サイトで断食食の作り方など実用的な技術も習得することができる。

このように、宗教的修行の意義が強かった断食は、養生法や娯楽、教養といった、メディアを通じて消費され嗜まれるパブリック・カルチャーとしての側面が強まっている。ただし、それは世俗的なカルチャーとは異なる。その背景には、不殺生の哲学やカルマ論に基づく死生観、奉仕のよろこびが深い動機としてはたらいっている。したがって、断食は閉じられた宗教実践ではなく、宗教性と世俗性を併せ持つ開かれた文化実践、すなわち「有徳なカルチャー」として実践されていると指摘できる。

VII おわりに

本論文は、英国レスターのジャイナ移民を対象に、オーリー祭での断食食とその調理・摂取の過程に着目し、断食がどのように解釈・実践されているのかを民族誌的に記述・分析した。そこから、以下の4点が明らかになった。

第一に、断食は依然としてカルマ論や不殺生の理念に支えられた宗教的修行として重視されている。断食は「カルマを燃やす」営みとして解釈され、実践においても水の使用・摂取方法に細心の注意を払う姿勢が確認された(事例2、9)。他方でその実践方法は各自の誓願に応じて調整されるなど(事例4)、多面的真理説を背景とした柔軟な実践であることもわかった。第二に、断食は養生法として実用的に再解釈されている。豆類、薬草汁、ヒングなどを中心に構成され

る断食食は、健康効果を意識して調理・摂取されており、断食は「健康によい」とする認識が共有されている(事例1、事例6)。健康志向の高さは奉仕者にもみとめられる(事例7)。このように、宗教的实践が「健康」という世俗的価値を伴って消費される現象は、ヒンドゥー教の断食とも重なる潮流である。第三に、断食は娯楽・楽しみとしても実践されている。多種多様な断食食の提供や共食のにぎわいは、断食とそれに伴う奉仕が人びとの楽しみや社交の場を生み出していることを示していた(事例8、10)。こうした「断食の楽しさ」は、宗教的修行の厳格さと矛盾せず、むしろ断食に複層的な価値を付与するものである。第四に、断食は教養としての側面も帯びている。インターネットを用いた知識の学習や技術の習得を強調する語りからは、「正しい断食」を学び実践しようとする人びとの努力する姿が見出せた(事例11、12)。ここには、移民たちが置かれるトランスナショナルな情報環境下での宗教的伝統の再編成が示されている。

以上から、ジャイナ移民にとっての断食は、単なる宗教的修行ではなく、宗教性と世俗性を併せ持つ複数の価値を束ねる「有徳なカルチャー」として再構築されていることが明らかとなった。前述したコープマンの議論に依拠すれば、ジャイナ移民の断食実践は、断食の宗教的枠組みは保持されつつ、その構造が部分的に「適応外利用」され、健康・娯楽・教養といった世俗的価値を生み出す回路へと展開している。文化(象徴体系)だけでなくカルチャー(物質的实践)であるからこそ、一部の修行者のみに閉じられた実践ではなく、誰もが手軽に学習し、柔軟なやり方で試み、経験を分かち合うことのできる開かれた実践となってきたといえよう。

さらに、断食はジャイナ移民に限られたものではなく、共食や奉仕を通じて宗派宗教を超えた他者との交流を生み出す契機ともなっている。ジャイナ移民がヒンドゥー教団体の奉仕に従事する事例や、出身地や宗派を超えた社交の場としてのセンターの機能は、断食を通じた公共空間の萌芽を示唆するものである。ただし、公共的なものの展開については、さらなる調査が必要であり、今後の課題としたい。

まとめると、断食は移民社会において宗教的伝統を維持しつつ、移動・生活環境・メディアの変化の中で再解釈され、開かれた文化実践へと変容しつつあ

る¹⁶。本論文は、ジャイナ教をマイノリティの宗教ととらえる先行研究に対し、「移動が宗教—カルチャーをつくる」という理論的視座及び民族誌資料を提示した。それによって、在英ジャイナ移民という枠を超えて、移民・ディアスポラの宗教実践と公共性の再編を理解するための新たな枠組みを照射した。

謝辞

本稿作成にあたって貴重な助言をいただいた匿名の査読者、そして編集委員の皆様へ深く感謝申し上げます。また、調査に協力していただいたフィールドの皆様へ心よりお礼申し上げます。なお、本稿が依拠する現地調査は、公益財団法人ロッテ財団奨励研究助成B「断食食にみる現代インド女性のライフスタイル」(2019年4月1日～2022年3月31日)、科学研究費補助金・基盤研究B「社会を形づくる宗教的贈与——インド系宗教における「徳の経済」の展開から」(2021年4月1日～2026年3月31日)の助成を受けて実施されたものです。

参考文献

(日本語文献)

上田 真啓

2017 『ジャイナ教とは何か——菜食・托鉢・断食の生命観』風響社。

加瀬澤 雅人

2018 「アーユルヴェーダと食」『インド文化事典』インド文化事典編集委員会(編)、pp. 380–381、丸善出版。

田口 陽子

2010 「コンタクト・ゾーンからみるインド料理の成立——ディアスポラの役割を中心に」『コンタクト・ゾーン』3: 124–143。

西坂 季恵

2021 「ジャイナ教在家信者の宗教規範と食生活——日本を事例に」『ジャイナ教研究』27: 25–61。

濱谷 真理子

2025 「インドの外でインド人であること——移民研究から」『アジア・マップ——アジア・日本研究Webマガジン』3: IN.1.01 (https://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/asia_map_vol03/india/country02/) (2026年4月10日最終アクセス)。

2026a 「徳とともに味わう——断食実践にみる在英インド系女性移住者のライフスタイル」『社会人類学年報』51: 31–63。

2026b 「断食がつなぐ、つくる〈家族的なもの〉——北

インド・マールグ祭を事例として」『南アジア研究』37: 79–110。

堀田 和義

2011 「宗教的生命倫理に基づく食のタブー——禁止された食物と不殺生」『死生学研究』16: 172–200。

矢島 道彦

2002 「ジャイナ教」『新訂増補 南アジアを知る事典』辛島昇ほか(監修)、pp. 324–328、平凡社。

山本 須美子

2020 「東京都在住ジャイナ教徒にみるトランスナショナルリズム」『白山人類学』23: 241–266。

渡辺 研二

2005 『ジャイナ教 非所有・非暴力・非殺生——その教義と実生活』論創社。

(英語文献)

Appadurai, Arjun and Carol A. Breckenridge

1995 Public Modernity in India. In *Consuming Modernity: Public Culture in a South Asian World*. Carol A. Breckenridge (ed.), pp. 1–20. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Banks, Marcus

1992 *Organizing Jainism in India and England*. Oxford: Clarendon Press.

Copeman, Jacob

2009 *Veins of Devotion: Blood Donation and Religious Experience in North India*. New Delhi: Routledge.

Cort, John E.

2020 Jain Society: 1800–1947. In *Brill's Encyclopedia of Jainism*. Cort, John E. et al. (eds.), pp. 216–247. Leiden: Brill.

Jain, Prakash C.

2025 *Jains in India and Abroad: A Sociological Introduction (Second Revised Edition)*. Pune: International School for Jain Studies.

Jain, Neelu and Benjamin Forest

2004 From Religion to Ethnicity: The Identity of Immigrant and Second Generation Indian Jains in the United States, *National Identities* 6(3): 277–297.

Pogačnik, Anja

2018 *Religious Change in Jain Diaspora: An Ethnographic Study of the Leicester Jain Community*. Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.

Shah, Bindi V.

2011 Vegetarianism and Veganism: Vehicles to Maintain Ahimsa and Reconstruct Jain Identity among Young

¹⁶ 本論文では断食を取り上げたが、そのほかの宗教実践においてもカルチャーとしての側面、すなわち物質的、娯楽的な要素が強まっている様子が見出せる。一例を挙げると、布施の一環として祭祀の最後に誰が献火の儀礼の布施をするかオークション形式で競うのが慣習となっているが、筆者が立ち会ったオークションでは聴衆の野次や煽りの中で額がどんどん釣り上がり、最終的に2,500ポンド(約50万円)で落札された(2025年9月7日、フィールドノートより)。

Jains in the UK and USA. In *Issues in Ethics and Animal Rights*. Manish A. Vyas (ed.), pp. 108–118. Delhi: Regency Publications.

2020 Jains in the United Kingdom. In *Brill's Encyclopedia of Jainism*. Cort, John E. et al. (eds.), pp. 375–381. Leiden: Brill.

Vallely, Anne

2004 The Jain Plate: The Semiotics of the Diaspora Diet. In

South Asians in the Diaspora: Histories and Religious Traditions. Jacobsen, Knut A. and Pratap Kumar (eds.), pp. 1–22. Leiden: Brill.

Zhang, Yifan

2024 Navigating Religious Hybridity: Dimensions of Jain Identity and Practice in Singapore's Pluralistic Society. *Religions* 15 (1522): 1–22 (<http://doi.org/10.3390/re15121522>)